

体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開

— 大学2年生前期授業における実践事例から —

Development of classes of Content of Child Care “Environment” Activity Program and Advanced Learning

— Case Study on Second-year Students of University Class —

次世代教育学部こども発達学科

岡野 聡子

OKANO, Satoko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：子どもと環境，保育内容「環境」，体験活動，発展学習，保育者養成

Abstract： The student who took this class answered “Very useful” was 95.8%. About Homework (Advanced learning (after class)), The student who took this class has been evaluated highly feedback. “Although there were many subjects, it was good for myself”. Also they wrote “I had not thought deeply about a child” and “I’m able to think about play of a child with an education effect”. From now on, it is necessary to devise exchange of Advanced learning.

Keywords： Environment for Child, Content of Child Care “Environment”, Activity Program, Advanced Learning, Childcare Training

1. はじめに

幼稚園教育要領や保育所保育指針の保育内容「環境」では、①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ、②身近な環境に自らかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする、③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする、といった3つの「ねらい」が掲げられている。これらの3つの「ねらい」を端的に表現すれば、子ども自身が好奇心や探究心を持って主体的に身近な環境とかかわる力を育成することを目指しているといえるだろう。

保育内容「環境」における授業展開では、この「身近な環境とかかわる力の育成」を学生自身に具体的に理解させるために、講義形式の授業だけでなく、演習形式の授業を取り入れている事例もみられる。(菊地(2007) 保育内容「環境」の授業実践記録を通しての一考察：理論と実践力の結合による保育内容の指導法を目指して(1)、小田(2007)「保育内容Ⅱ『環境』

の演習についての一工夫」：簡便な方法による野菜栽培についての体験的学習)

保育内容「環境」は、幼稚園教諭免許状および保育士資格の取得をするための必修単位である。本学では、この保育内容「環境」を「子どもと環境」という名称で開講しており、2年生の前期に受講できるように設定している。そして、免許資格を取得するためには、この保育内容「環境」以外に保育内容「健康」・「人間関係」・「言葉」・「表現」の履修をしなければならず、これら4つの科目は、2年生後期から受講をしていく。保育内容「環境」のみが他の保育内容よりも先に学生が受講をするという背景には、他の内容に比べて、保育内容の総論的な役割を担っているという理由がある。この「子どもと環境」では、幼児教育や保育内容の理解を深めるだけでなく、将来、保育現場での活躍を目指す学生の興味関心を高めることも必要となる。今回、筆者が実施した授業では、体験活動を取り入れながら、授業内で取り扱った内容への理解を深めるための発展学習として提出課題も学生に与えた。

本稿は、体験活動と授業後の発展学習を通して、保

育内容「環境」の内容の理解や幼児教育や保育に関する学習意欲がどのように向上したかを確認するため、授業評価アンケートや感想文から分析を行うことを目的としている。

2. 乳幼児教育における領域「環境」とは

乳幼児期は、子どもが自分なりに身近な環境にかかわって活動を展開し、そこからさまざまな刺激を受け、それによって充実感や満足感、達成感、あるいは挫折感や葛藤などを味わいながら精神的にも成長することが求められている。そのために、就学前施設である幼稚園や保育所では、保育者が計画的に環境を創り出し、子どもが友達とかかわって活動を展開するための素材や園具、遊具、時間、空間、また、生活の中で触れ合うことができる自然や動植物などの環境を用意することが求められる。こうした教育的配慮の下で創り出された環境の中で、子どもに意欲的に環境にかかわらせ、そのことを通して子どもの発達を促すことを「環境を通して行う教育」という。

ここで述べる環境とは、子ども自身が直接的・具体的にかかわろうとする身近な環境のことであり、たとえば、自然や事象といった「自然環境」、友達や保育者といった「人的環境」、設備や遊具、素材といった「物的環境」、文化や地域といった「社会環境」などの環境が一人ひとりの子どもの成長にとって価値や意味のある環境のことを指している。

幼稚園や保育所では、生きる力の基礎となる「心情・意欲・態度」を育むことを目標として教育活動を展開している。心情とは、「見てみたい」、「さわってみたい」という興味関心や「楽しい」、「うれしい」といった情感であり、意欲とは、実際に見たり、聞いたり、触ったりといった直接的・具体的な体験から、子どもが「もう一度、やってみたい」と思うことである。心情や意欲は、活動を通して子どもの内面に蓄積され、そうした心情や意欲の積み重なりが態度を形成していくといえる。

幼稚園教育要領や保育所保育指針では、生きる力の基礎「心情・意欲・態度」を育むために、次の5つの領域を編成して教育や保育を行っている。

健康…心身の健康に関する領域

人間関係…人とかかわりに関する領域

環境…身近な環境とかかわりに関する領域

言葉…ことばの獲得に関する領域

表現…感性と表現に関する領域

これらの5つの領域には、それぞれに「ねらい」と「内容」、そして「内容の取扱い」が設定されている。「ねらい」とは、子どもが生活全体を通してさまざまな体験を積み重ねる中で、「心情・意欲・態度」を育むための目標であり、「内容」とは、「ねらい」を達成するために教師が指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものである。この5つの領域は、小学校教育における教科学習のように独立したものではなく、それぞれが相互に関連しながら総合的に指導することが求められている。

その中で、この5領域の一つである保育内容「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを掲げている。この領域では、次の3つのねらいと11の内容が取り上げられている。

【ねらい】

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

【内容】

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 身近な物を大切にする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

ねらいの「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」という目標を掲げて保育を行う場合、目標を達成するための内容としては、「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」といった項目が対応していることがわかる。その他にも「(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」では、「(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。(9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。」が対応している。

また、子どもへの指導内容を充実させるためには、下記の「内容の取扱い」をよく理解しておく必要がある。内容の取扱いとは、内容をより理解するための留意事項のことである。次に示すものは、保育内容「環境」に関するものである。

【内容の取扱い】

- ① 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。
- ② 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるように工夫すること。
- ③ 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にすること、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- ④ 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自

身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。(下線部は、幼稚園教育要領(2008)が改訂された際に付け加えられた部分である。)

保育内容「環境」のねらいや内容、内容の取扱いを見ると、身近な環境の中で、自然とのかかわりを深めること、生活の中で身近な物や遊具にかかわって工夫して遊ぶこと、数量や文字に対する興味関心を養うことが重視されていることが分かるだろう。それらを通して「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを実現することが求められているのである。

また、保育内容「環境」を学ぶにあたって、その教育内容と同様に保育環境のデザインも考える必要がある。保育所保育指針には、保育の環境を構成するにあたって、次のア～エの留意事項を提示している。その留意事項に則って、計画的に保育環境を構成し工夫することが求められている。

- ア 子どもが自ら環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること…子ども自らが関わる環境
- イ 子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること…安全で保健的な環境
- ウ 保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること…温かな雰囲気と生き生きとした活動の場
- エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること…人との関わりを育む環境

「ア」では、「子どもが自ら環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んで」とあるように、保育者は、子どもが思わず「さわってみたいな」、「やってみてみたいな」と思えるような魅力のある環境を意図的に作り出すことが求められている。保育者が用意した環境で遊ぶだけではなく、子ども自身が環境を再構成する力も養う必要がある。「イ」では、施設などの環境整備を通して、「保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること」とされている。保健的環境とは、採光や換気、保温、清潔などを指している。子どもたちが快適に過ごせる環境を整えると同時に、特に危険の

防止と災害時における安全の確保について日ごろから点検を行っておく必要がある。「ウ」では、保育所は子どもが長時間生活（8～10時間程度）をするため、「温かな親しみとくつろぎの場」であるとともに、「生き生きとした活動の場」となるように、2つの環境を構成することが求められている。保育所内において静と動といった空間をどのように構成するか、保育者の環境構成に対する思いが見える場面であると言える。「エ」では、「人と関わる力」を育て、「子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整える」ことが必要であるとされている。周囲の人との関係とは、同年齢の子ども同士の関係、異年齢の子ども同士の関係、保育者との関係、地域の様々な人との関係である。人と関わるができる環境を具体的に述べると、同年齢や異年齢の子どもが複数で遊ぶコーナーを設定したり、園外保育にて、地域の人々と知り合う機会を設けることだと言える。

3. 体験活動と授業後の発展学習について

全15回の「子どもと環境」の講義のうち、第2回から第12回までの講義は、学生自身の体験を重視した授業を展開しつつ、教科書（小田・湯川編著（2009）『保育内容環境』）の用語の確認（漢字の読みも含む）や本読み、必要に応じて追加資料の配布および解説も行った。授業後の発展学習として、課題の提出を求めたが、これは学生の負担も考慮し、合計5回行った。第13回以降は、学生自身に講義内での体験活動や提出した発展学習の振り返りをさせるとともに、幼稚園教育要領と保育所保育指針のねらいおよび内容、内容の取扱いの解説、指導計画（設定保育）の立て方、指導計画内の環境構成の方法の指導を行った。

【授業テーマおよび内容、発展課題】

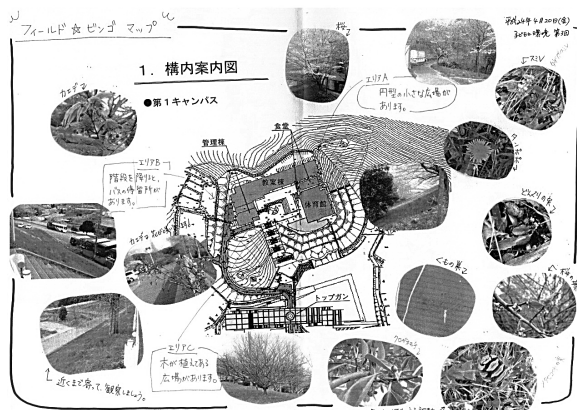
第1回 オリエンテーション及び保育内容「環境」の意義

- ・5つの領域である健康・人間関係・環境・言葉・表現の内容およびそれぞれの関係性について理解し、子どもと環境を学ぶ意義を解説した。

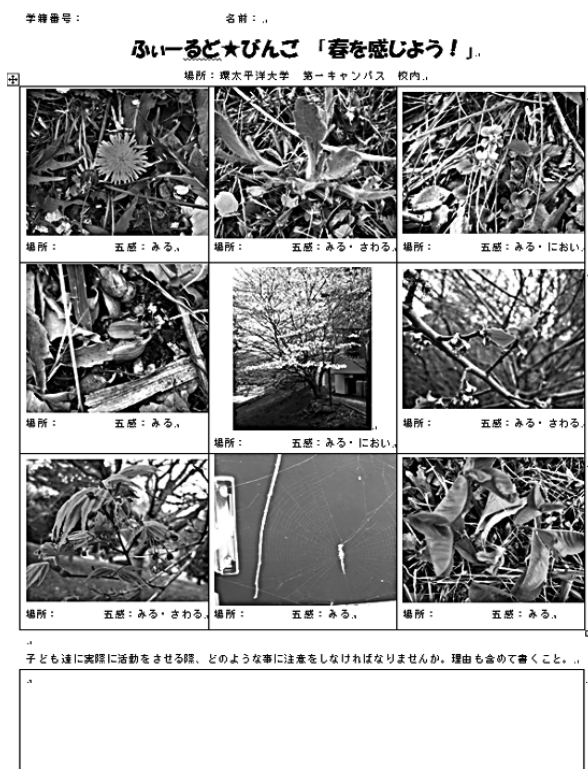
第2回 自然観察「センスオブワンダーを通して」

- ・Rachel L. Carsonの「センスオブワンダー」を読み、5感を働かせて自然環境とのかかわることの意義について解説した。自然環境とのかかわりを深めるために、下記の校内フィールドマップ（資料

1）とビンゴカード（資料2）を学生に配布し、フィールドビンゴゲームを行った。



資料1「校内フィールドマップ」



資料2「フィールドビンゴカード」

発展学習

「学内フィールドビンゴ「春を感じよう!」」をテーマに、学生自身に校内を散策させ、幼児が扱えるフィールドビンゴカードを作成させた。

第3回 保育内容「環境」と幼児理解

好奇心や探究心、内発的動機付けについて具体例を用いて学び、幼児の好奇心等が育まれる環境設定について解説した。

第4回 好奇心・探究心をはぐくむ指導とは

応答的環境について学び、可塑性に富む素材である新聞紙を事例として、さまざまな素材と関わることの意義や素材の効果的な扱い方、留意点について解説した。(資料3)



資料3 「新聞紙を取り扱う学生の様子」

第5回 思考力の芽生えをはぐくむ指導とは

幼児期の思考である感覚運動的思考や象徴的思考、直感的思考、論理的思考を幼児の発達段階に合わせて解説した。

発展学習 「身近な素材を用いた遊び作り」をテーマに、身近な素材とは何かを考えさせ、幼児自身が作って遊ぶことのできるおもちゃについて考えさせた。

第6回 人的環境の保育的な特性

人的環境としての友達や保育者について、親友、たんなる友達、苦手な人を具体的にイメージさせ、それぞれの人が自分にとってどのような意味をもつか、自己の成長・発達という観点からプラスとマイナス面を取り上げて考えさせた。

第7回 園内環境のあり方と保育教材の扱い方

環境教育の視点から捉えた園内環境の在り方や保育教材について解説をした。また、乳幼児期における安全能力の形成について園内の写真を提示しながら学びを深めた。

発展学習 「園内・園庭環境マップ作り」をテーマに、保育室内外にある園具や遊具の絵や写真のシートを学生に配布し、幼児の遊びを

生み出す園内環境のデザインを行った。

第8回 1年間の保育記録(映像学習)

文部科学省特別選定ビデオである1人の子どもの入園から卒園まで3年間の保育記録「①よりどころを求めて3歳児前半」(38分)から、子どもの成長を通して、園での生活や保育者の役割、友達とのかかわりなどを見て、配布したワークシートに記述をさせた。

第9回 1年間の保育記録(映像学習)

第8回の続きである「②やりたいでも、できない3歳児後半」(35分)をみて、幼児の発言や行動から、幼児の気持ちについて理解を深めた。配布したワークシートに感想を記述させた。

発展学習 「季節感への気付き(地域行事)」をテーマに、月毎に「自分が季節感を感じるもの」、「一般的な行事」、「私の地域における行事」のシートを作成させた。(資料4)

「季節感」への気付き

学籍番号: _____ 氏名 _____ 出身地: _____

ねらい: 季節により、自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

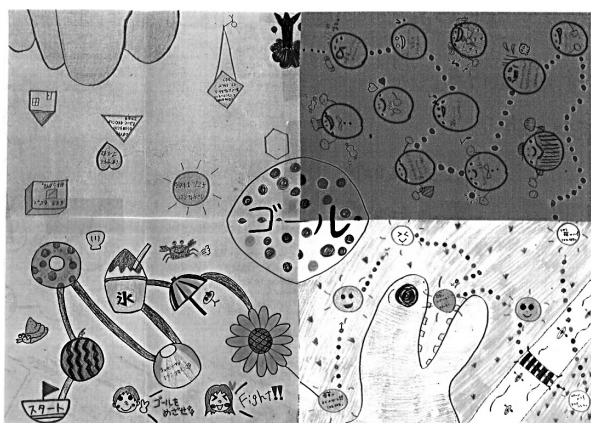
月	自分が季節感を感じるもの	一般的な行事	私の地域における行事
4月			
5月			
6月			
7月			
8月			

資料4 「「季節感」への気付き」

第10回 数量への興味「すごろく作り」(グループワーク)

幼児の数量への興味関心を引き出す環境づくりとして、グループワーク形式ですごろく作りを行った。グループ作りは、一つのグループが5～7人になるよう

に学生に指示をした。(資料5)



資料5 「学生が作成したすごろく」

第11回 数量への興味「すごろく作り」(グループワーク)

第10回の続きを行った。作成終了後に、作品の相互評価を行った。自分の作成したもので実際に遊べるかを確かめさせ、保育活動における振り返りの重要性についても解説した。

発展学習 「数量／文字／図形／標識に関わる遊び作り」をテーマに、幼児自身が遊びながら数量／文字／図形／標識への興味関心を高める環境づくりについて考えさせた。(資料6)

課題「数量・文字・図形・標識」に気づく遊びを考えよう！
遊びの内容： 数量 / 文字 / 図形 / 標識
対象年齢： 3～5歳

※「遊び」を図や絵・説明を用いて書く(描く)こと

〈文字カード / 3～4歳〉

一文字ずつ書いてある文字カードを用意する。
保育者がカードをランダムに引いていく。
引かれた文字が、自分の名前に入っていたら、前に出て来て並んだり、先生とタネする。

〈図形 / 4～5歳〉 ☆色鬼の変形Ver.

▷ 鬼の合図で「○○!」(四角、丸、三角など)と言ったら、その形を探し、触る。
▷ 探している子を鬼は捕える。
▷ 触ったら、捕まらない。
▷ 捕まったら鬼になる。

資料6 「数量／文字／図形／標識に関わる遊び作り」

第12回 物事の法則性「小麦粉粘土」(グループワーク)

理科実験室において、小麦粉粘土作りを行った。小麦粉粘土は、幼児が口に入れても安全であり、代表的な保育教材の1つである。作り方の解説をし、食紅を用いて小麦粉に色を付け、食べ物をテーマとした作品を作った。(資料7)



資料7 「小麦粉粘土を取り扱う学生の様子」

第13回 幼稚園教育要領と「環境」の領域

学校教育法第22条および幼稚園教育要領のねらいと内容、内容の取扱いについて、これまでの授業内容を振り返りながら解説した。

第14回 保育所保育指針と「環境」の領域

第13回の幼稚園教育要領を踏まえながら、保育所保育指針における「保育の環境」を中心として解説した。

第15回 保育内容「環境」の振り返りおよび授業評価アンケートの実施

これまでの授業の取り組みをパワーポイントを使用して提示し、授業内容の振り返りを行った。最後に授業評価アンケートへの記入をさせた。

4. 授業方法

本授業は、本学の次世代教育学部乳幼児教育学科2年の幼稚園教諭免許状・保育士資格取得希望者(79名)を対象として毎週金曜日の3,4講時に行った。授業は、通常の講義室以外にも体験活動を行う上で適切な場所、大講義室や理科実験室、学内の広場を指定して開講した。また、本授業では学生自身の体験から得た気づきを重視しているため、授業の終わりには感想や学んだことを書かせて提出させ、次の授業内で

フィードバックをした。(資料8) また、授業内で作成した作品を学生同士で評価し合う相互評価の時間も設けている。(資料9) 作品の相互評価では、大き目の付箋(76mm×127mm)を配布して、そこに作品の良い点や工夫されている点などプラス面を書かせ学生同士の交流も図っている。

小麦粉粘土を作ろう！

- 1. 小麦粉に水を入れて混ぜ合わせた時の感触を言葉で表現してください。
小麦いい～!! やわらかくて気持ちよかった。
幼稚園の頃思い出した!!
 - 2. 何を作りましたか？作った品物を全て書いてください。
ショートケーキ、フォーク
 - 3. 作成過程・作成物において、どのような事を工夫しましたか。
あ利色がまだらにならぬように。
くっつける時、水を付けてひっつけるようになった。
 - 4. 子ども達と遊ぶ時、何に気を付けなければならぬと思いますか。
食べないように。
食紅を使うがマールもきれいなものを考え、使いすぎないようにする。
 - 5. 小麦粉粘土作りを通して、思ったこと・感じたことを書いてください。
実際に自分が楽しむことですごく楽しかった。
楽しいことは考えをあげることができ、すごく楽しかった!!
食紅や食紅を存分にたのしめることができた。
- 資料8 「ワークシート：授業の感想や学んだこと」



資料9 「作品の相互評価をする学生の様子」

また、先述したように、授業で得た知識を活用できるようにするため、第2回、第5回、第7回、第9回、第11回の講義終了後に発展的学習として課題を与えた。課題を与える際には、①提出期限の厳守、②提出された課題は次回にフィードバックし、学生内で共有することを伝えた。

5. 結果と考察

(1) 学生の出席状況

学生の出席状況は、表1の通りである。
本学では、体育会(全学における7割が体育会所属者)に力を入れていることもあり、大会出場者には公欠を認めているため、欠席扱いにしていない。公欠者には教科書の要約課題(800字)を与えている。学生の出席状況は、91%の学生が2回以内の欠席であった。

表1 「学生の出席状況」

欠席回数	人数
0回	51
1, 2回の欠席	21
3回以上の欠席	7
合計	79

(2) 授業後の発展学習

発展学習として、合計5回の課題を学生に与えた。提出期間は、授業日も含め6日間を設定した。教科書と図書館に常設されている保育雑誌を利用するように伝えた結果、図書館内にて課題をする学生の姿が増加した。また、提出された課題をポイントごとに整理して学生にフィードバックすると、「他者のアイデアを知ることができるので自分のためになった」や「実習に行ったときに役立つ」という意見が目立った。発展学習の提出率の結果は、表2である。

表2 「発展学習のテーマ」

回	発展学習のテーマ	提出率
第2回	学内フィールドビンゴ「春を感じよう」	89%
第5回	身近な素材を用いた遊び作り	82%
第7回	園内・園庭環境マップ作り	78%
第9回	季節感への気付き(地域行事)	86%
第11回	数量・文字・図形・標識に関わる遊び作り	80%

(3) 学生の授業評価

各項目について、5点尺度(不必要である(1点)から必要である(5点)まで)の回答を求めた。アンケート結果は、授業後の発展学習よりも体験活動に対する必要性が高く評価されていることを示している。
但し、本アンケートが必要性についての問いかけであったものの、学生は自らが楽しいと思ったものに高

得点をつける傾向にあったと考えられる。このことは、発展学習、課題提出より提出課題のフィードバックの必要性が高く評価されている点にも表れている。

表3 「学生の授業評価」

項 目	平均値	標準偏差
教科書の用語の確認	4.03	0.839
授業内の本読み	3.68	0.868
授業内の配布資料	4.41	0.761
映像学習	4.54	0.646
体験活動（素材とのかかわり）	4.68	0.708
室外授業（フィールドビンゴ）	4.34	0.918
グループワーク	4.44	0.8
授業後の発展学習：課題提出	3.86	0.997
提出課題のフィードバック	3.94	0.918

6. おわりに

本授業が「役立った」と回答した学生は、95.8%であった。体験活動では、「メタセコイヤの小さな葉は、見た目はチクチクしていそうなのに、触った感覚が柔らかくてまるで違う。」や「実際に自然や素材と触れ合うことで、より具体的に授業の主旨を理解することができた。」との感想がみられた。授業後の発展学習では、「課題が多いけれど、それも自分のためになった。」など、フィードバックを高く評価している学生の感想が多くみられた。また、「子どもについてここまで深く考える機会はなかった。」や「子どもの様子やどんな遊びを取り入れたらよいか自分で考えることができた。」との回答があり、子どもの理解に対しても一定の学習効果が見られたと考えられる。上記の感想から、学生自身の体験を通して、「子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作り」を学べた点は大きかったと言える。その一方で、授業後の発展学習の交流のあり方の工夫が今後の課題であると思われる。

引用・参考文献

- 菊地恵（2007）「保育内容「環境」の授業実践記録を通しての一考察：理論と実践力の結合による保育内容の指導法を目指して（1）」、聖園学園短期大学研究紀要 37, pp. 73-82
- 小田豊・湯川秀樹編著（2009）『保育内容環境』北大路書房
- 小田賢司（2007）「保育内容Ⅱ『環境』の演習につい

ての一工夫：簡便な方法による野菜栽培についての体験的学習」長崎短期大学研究紀要19, pp. 113-118

厚生労働省（2008）「保育所保育指針」

厚生労働省（2008）「保育所保育指針解説」フレール館

田宮縁（2011）『体験する・調べる・考える 領域「環境」』萌文書林

高梨圭子「3. 保育内容・方法がわかる 4 子どものための保育内容とは」、森上史朗編（1998）『幼児教育への招待—いま子どもと保育が面白い』ミネルヴァ書房

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」フレール館

Rachel L. Carson著，上遠恵子翻訳（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社